

生活力を育むための題材設定

～体験的・実践的な活動の積み重ねを生活へつなげる～

藤原 ゆうこ

“生活力”を「将来にわたってより健康的で快適な生活を創ろうとする力や心情」とし、このような力を小学校の家庭科学学習で育み、実生活へ活かせるものとしていくためには、どのような体験的・実践的な活動を取り入れた題材を設定し、手立てを行うことが効果的なのだろうか。

今回は、来年度から新学習指導要領で新たに項立てされることになる「D 身近な消費生活と環境」領域の題材開発も念頭におくことにした。そして、現代の消費社会において、生活力を育むことを目的とした題材設定を行うことを研究テーマとした。そのための方法として、繰り返し学習する場を設定することで意識の定着化を図ること、子どもたちの視点を明確化すること、現代社会の実態と関連づけることの3点を意識して取り組むこととした。

キーワード：生活力、消費生活、実生活、多角的なものの見方

1. 研究の目的

1. 1. 生活力を育むためには

家庭科学学習において、「学びの質の高まり」とは、自分らしく生活に生かそうと工夫する姿への変容がみとれる学びである。そして、その積み重ねが、将来にわたってより健康的で快適な生活を創ろうとする力や心情（生活力）が育まれると考える。

6年生という発達段階の子どもにとって、頭で理解したり、他者からの話を聞いて考えたり、体験的な学びを取り入れたりすることも、大変意味のあることである。一方では、その場限りになりがちで、実生活とは距離感のあるものになってしまいがちでもある。

本研究では子どもが「本当にそうだ」「これは大切なことなんだ」と、心底実感できるような体験的な活動を取り入れていくことで、生活への実践へつなげていきたいと考えている。そのためにはどのような題材設定の工夫、授業形態がふさわしいのかを明らかにしていきたい。

1. 2. 身近な消費生活と環境への取り組み

本題材は、新学習指導要領で新たに項立てされることになる「D 身近な消費生活と環境」を扱う。その際の注意事項として、「A家庭生活と家族」「B 日常の食事と調理の基礎」「C 快適な衣生活と住まい」との関連を図り、実践的に学習することとされている。

[D 身近な消費生活と環境]

(1) 物や金銭の使い方と買い物について、次の事項を指導する。

ア 物や金銭の大切さに気付き、計画的な使い方を考えること。

イ 身近な物の選び方、買い方を考え、適切に購入できること

(2) 環境に配慮した生活の工夫について、次の事項を指導する。

ア 自分の生活と身近な環境とのかかわりに気付き、物の使い方などを工夫できること

消費者としての意識を小学校家庭科の授業の中でどのように位置づけ、題材を設定し、取り組むことが、現在の消費社会を生きる子どもたちにとって実のある力を育むことにつながるのか、次の3つの方法でさぐっていきたい。

2. 研究方法

2. 1. 繰り返し学習する場を設定する

1学期に、まず内容A、Bとの関連を図っての題材を設定した。子どもが消費者としての自分を意識し、物や金銭の使い方や買い物の仕方を考え、判断できる生活者となることへの第一歩になるようにという願いからである。

2学期には、内容Cも含み、身の回りの持ち物の購入の仕方、使い方等を考える。様々な環境や状況を設定し、消費者として、多様な情報の中から意志決定することの重要性を実感できるこ

とをねらいとして題材を設定した。

3学期には、卒業を目前にした子どもたちがお世話になった方への「ハートフルギフト」作りを計画する予定である。その際、内容のA、B、Cすべてとの関連をはかり、必要な物をどのように手に入れるべきかを考えさせたいと考える。

家庭との連携はもちろんであるが、学校でも繰り返し学習する場を設定していくことで、消費者としての子どもたちの意識を高めていきたい。

2. 2. 視点の明確化を図る

家庭科の学習では、子どもたちが自分の思いや好み、学習から得た知識をもとにしながら、自己の生活と関連づけ、取捨選択したり、価値判断したりしていく場面に何度も遭遇することになる。欲しいものを購入するのかどうかもちろんであるが、例えば、朝食メニューの主食をごはんにするのかパンにするのか、コーンフレークや栄養補助食品はどうか、フルーツや野菜を購入するときに、1つまると買うのかカットされた物を買うのか等である。

一般的に「よい」と判断されていることや、理想的な形をイメージしながら正しい、正しくない、よい、悪いと決めてしまうことは、実生活へのつながりが弱くなってしまうおそれがある。現在の生活環境や自分の思いを見つめ直し、様々な情報の中から多角的なものの見方での価値判断力を育てていきたい。それこそが実生活へつながることになるだろう。多角的なものの見方をすることを前提として、物の選び方、使い方、保管の仕方等を自分自身で決定していくことが大切であると考える。

①「無駄をなくす」「再利用する」「ゴミを減らしたり分別する」等環境への意識、②「買い物時のマナー」「相手意識のある商品の選び方」等家族や身近な人への気遣い、③「便利さ」「面倒くさい」「自分が欲しい物を購入する」等安易な考え方、3つの視点をもって、消費生活のあり方をさぐっていききたい。

題材名を「見つけよう！とっておき☆マイライフ」とし、サブテーマを3つの視点をもとに～地球にやさしく・人にやさしく・自分にやさしい消費者をめざして～とした。

2. 3. 現代社会の問題や実態と関連づけて

消費生活を学習するに当たり、子どもたちにとって身近に感じられ、実生活に活かしていける体験的・実践的な活動とはどのようなものなのか。

1学期には、『よりよい商品を選択する』買い物の仕方について、“地球にやさしい・人にやさ

しい・自分にやさしい消費者”の視点から何を選ぶべきかをAさん、Bさん、生活環境の異なる二人の買い物場面から学習することにした。そして、朝食作りに向けて、実際に近隣のスーパーでの買い物体験も行った。

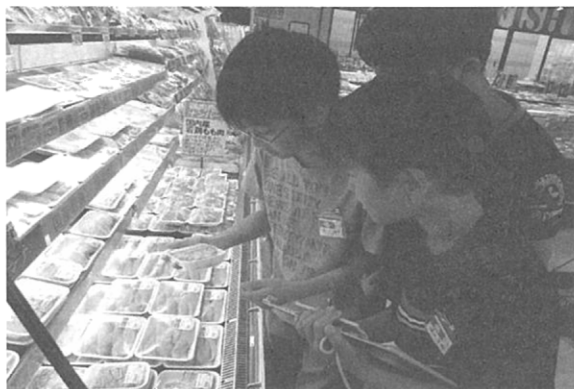


写真1 実際に買い物する商品を検討し合う場面

2学期には、店舗からの購入だけでなく、ネット購入やテレビショッピングなど、現代人のライフスタイルと関わって『よりよい商品を選択する』方法を学習することにした。また、本当にその商品を購入する必要があるのかどうかについても考える機会を持った。



写真2 宣伝内容を確認する場面



写真3 買うべきか否かグループで話し合う場面

3学期には地球規模での環境問題・人権問題に視野をひろげて、チョコレートを題材に、フェアトレードの問題にふれていきたい。子どもたちに

とって「ものを買う」という行為が、「よりよいものを選ぶ」だけでなく、社会全体に影響する行為であることに気づいてもらいたいと考える。そして、最終的に「ハートフルギフト」の製作に当たって、必要な材料の収集について、自分なりに考えた方法で行っていききたい。

このような体験的・実践的な活動の積み重ねを、子どもの実生活へつなげたい。

3. 見つけよう！とっておき☆マイライフ

～地球にやさしい・人にやさしい・

自分にやさしい消費者をめざして～

3. 1. 1学期の実践より

～2つの買い物場面を比較して～

ここでは、自分の一日の生活を振り返り、見つめなおすことから題材をスタートさせた。“朝の生活”に着目し、睡眠・食事等、基本的な生活リズムを整えることの大切さや時間を有効に活用する事のよさを実感し、1食分の食事への導入としてメニュー作りと朝食作りを行った。

そして、授業では生鮮食品・加工食品それぞれを買い物する際の上手な選び方を確認しあった。その上で、Aさん（家族がいて、簡単な調理行っている家庭）とBさん（一人暮らしの家庭）が明日の朝食のための食材を購入する場面をビデオ撮影し、実際に子どもたちと見ることにした。

写真4 Aさんが購入した食材



写真5 Bさんが購入した食材



ビデオをから、子どもたちが吟味しあった点は「牛乳」の選び方とエコバックを使用しているかどうかの2つであった。

Aさんは賞味期限を見ながら日が遠い牛乳を選んだのに、Bさんは賞味期限の近い牛乳を選んだ点である。今まで、「賞味期限が遠いもの」を選ぶことがよいと考えていた子どもたちからは「え！なぜ！？」というまどいが見られた。そして、ある児童が「わかった！地球にやさしい！視点だ。明日飲むってわかってたら、何も賞味期限の遠い牛乳選ぶ必要ないから。近いものを買った方が、無駄なくていいと思います。」なるほど。今まで、そんなこと考えたことなかった。「Aさんは、大きいパックだから、1日では飲みきれない。だから、賞味期限の遠いものを選ぶことが必要なんだ」等発言が続いた。

エコバックの使用について、Aさんは使用していたが、Bさんは5円支払ってレジ袋を購入して使用していた点。ある児童から「レジ袋って、ゴミ袋にしたり野菜を入れておいたりできるから、家ではお母さんが時々欲しいっていつてるのを聞いたことがある。だから、きちんと使ったら決して環境に悪いばかりとは言えないと思う。」と発言。それに続き「レジ袋は破れるまで何度も使えて便利。一人暮らしのBさんだったら、必要かも。」「でも、必要以上に使うことは無駄だから、家にあるときはエコバックを使う方がいいと思う。」「Aさんは思いものや堅いものから先に入れていたよ。買った後の商品の扱い方も大切だと思う。」「すぐに冷蔵庫に入れる方がよいものと、常温保存した方がよいものがあるよね。」等の発言が続いた。

生活環境の異なる2人の買い物場面を吟味し合うことで、子どもたちにとって新しい視点が生まれたようであった。その後、実際に買い物を行う場面でも、状況に応じて買い物の仕方を工夫し合う姿が見られた。

3. 2. 2学期の実践より

～欲しい！買いたい！その時どうする？～

2学期は、3つの視点をもとに、衣服の購入について、子どもたちの使用頻度が高い物から4つ“店舗・ネット・通信販売・フリーマーケット”を選び、それぞれの購入方法の長所と短所を話し合った。「お年寄りや仕事が忙しい人にはネットや通信販売での購入は便利」「フリーマーケットは再利用できるから地球にやさしいね。」等、確認し合うことができた。そこで、「本当に買うべきなのかどうか。」を考えるとという場面を授業で設定したいと考えた。子どもたちにとって身近

な本校の先生たちに協力していただき、実際に様々な方法で「欲しい！」と思って購入したものをもとに授業を行うことにした。ここでも、1学期に引き続き、それぞれの先生から「いつごろ、どのような方法で購入したのか、購入した動機は何なのか、購入後の状況はどうか。」についてのコメントをビデオ撮影し、授業で使用した。

実際に購入したものの、使用し切れていない商品があることに気づき、「そういえば、我が家でも・・・」と自分の家庭における消費生活について、振り返る機会ともなったようである。



写真6 授業で使用した5つの商品

4. 考察＝消費者としての意識の芽生え＝

1学期の取り組みにおいては、3. 1項で述べたとおりである。今まで何気なく買い物していたり、できるだけ新しいもの、賞味期限（消費期限）の遠いものを選ぶことがよい、エコバックを使用することがよくてレジ袋はダメだという固定概念をもっていた子どもたち。本題材を通して、使用する日時や生活環境など、いろいろな要素を含めて考えていくことが大切であること、商品そのものやラベルをきちんと確認することが大切であることを実感できたと考える。また、常に“地球にやさしく・人にやさしく・自分にやさしく”という3つの視点をもったことは、話し合う際のよりどころとなった。

2学期の取り組みにおいては、実際に購入したものの、その後あまり使用していないものの多さにはじめはびっくりしていたようである。でも、テレビショッピングやCM、広告などは見ると欲しくなってしまう、「お母さんが欲しい！ってすぐに電話して買ったのに、全然使っていない〇〇が、今では洗濯物を干す道具になってしまっている」など、自分の家庭を振り返る機会ともなった。でもCMや広告の目的は「商品を買ってもらおうこと」だから、見て欲しくなるのは当たり前であることも納得。そこで、ある商品を、子どもたちが実際に使用して、広告と真実であるかを確かめてみた。すると、広告の内容は本当であると実感。子

どもたちは、「ついつい欲しくなってしまうけど、やっぱりテレビショッピングなども、忙しい人には便利。宣伝内容をしっかりと聞いて、買うべきかどうかをじっくりと考えてみたり、誰かに相談してみるといいのでは？」「同じような商品が店舗で売っていたら、実際に見て確かめてみると失敗はないかも。」「先生たちが貸してくれた商品も、何度も考えたものは、壊れるまで使用している。すぐを買うのはやめた方がいいと思う。」等、自分の考えを出し合うことができた。

5. 成果と課題

研究方法として以下の3点、①繰り返し学習する場面を設定したこと、②視点の明確化を図ったこと、③現代社会の問題や実態と関連づけたことについて、それぞれ有効であったと考える。家庭科は2年間を通して115時間という少ない時間の中での学習である。学習する内容に併せて“D身近な消費生活と環境”内容をリンクさせて何度も学習する場面を設定したり、ビデオなどのICT活用によって比較・確認したりすることで、時間の効率化も図ることができた。また、視点の明確化をはかることは、話し合い活動がひろがりすぎた時に、立ち返ることもでき、子どもの意識も明確化できたと思う。

実際に子どもたちは「買い物する」時に、表示ラベルを見て確認したり、商品をじっくりと観察したり、産地を確かめたりする姿が自然に見られている。

今後の課題は、本当に必要かどうかをじっくり考えるという点で、もう少し工夫が必要であったということである。子どもたちが、「欲しいもの」と「必要なもの」は同じではないということへの意識は低く、「ものを選択する」という行為の方へ偏っていたことは否めない。それには“消費する”という行為を、もっと深く考える必要があるだろう。

そこで、3学期には本題材のまとめとして、総合的な学習とリンクさせながら、チョコレートを題材にフェアトレード問題について学びを深めていく予定である。ここで、新たな視点を子どもたちにもたせることで、自分たちが“消費する・購入する”という行為について、地球規模でもう一度考えたい。“消費する・購入する”という行為が社会生活において、大きな意味を持った行為であることを子どもたちとともに学び、本当の意味での消費者意識の高まりとしたい。

【参考文献】

文部科学省 「新しい学習指導要領」

第2章 各教科 第8節 家庭

金子佳代子・藤原孝子・編著「小学校新学習指導要領ポイントと授業作り」家庭 東洋館
長尾弥生・著「フェアトレードの時代」

日本生活協同組合連合会